



正宗白鳥全集

第二卷

福武書店

正宗白鳥全集第二卷

一九八三年六月二十日 印刷

一九八三年六月三十日 發行

著者 正宗白鳥

發行者 福武哲彦

發行所 株式會社 福武書店

東京都千代田區麹町六十六

〒100 電話(03) 3301233

振替口座(東京) 六一〇五〇七

印刷・製本 大日本印刷株式會社

定價 五八〇〇圓

第二回配本(全三十卷)

(落丁・亂丁本はお取り換え致します)

正宗白鳥全集 第二卷

監	編	裝
修	集	丁
井	紅	山
伏	野	高
鱒	敏	登
二	郎	
	中	
	島	
	河	
	太	
	郎	
	健	
	吉	
	夫	
	村	
	光	

第二卷 小說二 目次

一幕見 仕合者 碁敵 鬘 古手帳 雨の宿 隣 夜瀛車 惡緣

三 九 七 六 三 五 五 七 二

落
日

六

銀
時
計

一
三

雷
雨

一
七

自
分
の
家

一
四

若
道
心

二
〇

浴
醫
の
家

二
三

噂

二
五

猫

二
三

傍
見

二
〇

開	徒	名	古	古	S	動	葬	從
店	勞	殘	書 畫	蹟	塾	搖	式	姉
三六	三〇三	二九六	二九三	二六七	二八四	二七	二六	二五

親心	呪	波の音	舊知	友情	盲目	微光	一夜	こんな一日
四三	四六	四六	四二	三九	三六	三三	三七	三三

涙

四六

危険人物

四七三

他所の戀

四八五

お芝居

四九六

畜生

五〇七

解題

中島河太郎

五七

小
說
二

悪 縁

一

異訓一は所在なさに、近くの珈琲店へ行つて、新聞でも讀まうかと、外套も着ず帽子も被らず、臺町の下宿を出た。出がけに故郷の妹からの手紙が玄關に投げ出されてあるのを見て、急に心がそれに注がれ、その長い解り難い文句を一心に讀みながら、戸外を歩いた。そして讀み終つた頃、足は自然に久我とよ子の宿へ向つた。

千駄木の或る通。麵麴屋と焼芋屋とに挟まれた細い路次の奥は、袋のやうになつて、その中に三四軒古びた家が建

つてゐる。訓一は片手を懐に入れ、滑つこい溝板の上をノロ／＼通つて、その袋の中へ入つた。狭い空地には、番傘と蛇の目とが道を遮り、鮮やかな朝日を浴びてゐる。平生騒がしいこの近所も、今は静かだ。

彼れは心寛やかに、柔かく濕つた垣根や屋根を見てゐた。垣外の公孫樹の痛さうに尖つた枝を見てゐた。忙しうに首を動かしては、羽を光らせて飛んで行く雀を見てゐた。そして「今日は春みたやうな日だ。」と思ひながら、邪魔物の傘を取のけるのも懶いやうに、遠廻りして袋の縁を傳ひ、ソツと窓の側に立つてゐた。

これ迄は此處でよく合圖の口笛を吹いたものだ。指先でコト／＼と障子を叩いたこともある。然し今日は何ともしない。聲をも掛けない。室内もヒツソリしてゐる。「あないのか。」と疑つて、暫らく耳を澄まして窺つてゐると、カサ／＼と新聞か何かを疊む音がして、やがて押入の戸が締つた。机の側へ來る女の足音が聞える。荒々しく肩を揺り上げる音が不快に耳に響く。訓一はその音を聞いて、障子一重隔てた女の顔付が目に見える様に感じた。氣分が悪くて、モダ／＼するらしい時には、さも衣服が邪魔になるかのやうに、顔を盛めて肩を揺るのが、その女の癖で、今の訓一にはその様子が小憎らしく感ぜられる。

室内でも人影に氣づいたのか、障子を細く開けて、「あら……誰れかと思つたら。」と、机から伸び上つて、青白い顔の半面を現した。

「上らうかなあ。」と、訓一は氣の進まぬやうに云つて、縁側へ廻つて、部屋へ上つた。僅かな道具も、今日はキッチンと片付けてあつて、風琴の位置もこの前とは變つてゐた。

「何だか異つた家へ來たやうだ。」と、周圍を見てから、最後に女の顔を見た。少し赤茶けた油氣のないバサ／＼した髪が、際立つて目につく。

「私、早く外へ移りたいわ。」と、とよ子は鼻聲で早口に云つた。

「さうかい、いゝ所があつたら移つたらいいだらう、何處へでも。」

「いゝ所つて、まだ見つからないんだけど、此家は一日も厭になつたんですもの。」

「家の者が下等だからと云ふんだらう。」と、訓一は懷手のまゝ火鉢の前に坐つたが、坐り様が落付いてゐない。

「だつて、始終厭らしい話ばかり聞されるんですもの。」と、とよ子は口のあたりに淋しい笑ひを浮べて、

「本當に人を馬鹿にしてるわ。」

「そりや仕方がないさ。」と、訓一は冷やかに云つて、心ではどうせ尊敬される柄ぢやあるまいしと思つた。

女は斜めに男に添うて坐り、青筋の浮んだ薄い手の表を火鉢に翳し、上目で男の顔を偷み見しながら黙つてゐた。

この頃は二人とも話に夢中になることが少なくなつた。少なくとも以前のやうに、自分達の過去や將來を語り合ふことはなくなつた。その癖二人の心の中では、別々に過去と將來を思つてゐる。

「今日は暖かいから、久し振りに散歩でもしようぢやないか。」と、訓一は氣まづい思ひを強いて振り落して、元氣よく言つた。

「だつて、まだ道が悪いでせう。もう乾いてるかしら。」

「まだ乾いてやしないさ。ぢや止さうか。どうせ田端の田圃道は歩けりやしないから。」と、意味ありげに目で笑つたが、女は何とも感ぜぬらしく、

「貴郎、今日はお休みな。日曜ぢやないんでせう。」

「呑氣だねえ。今日は祭日ぢやないか。通りにや旗が立つてるよ。」

「あゝ、孝明天皇祭だつたわね、では市は賑やかでせう。何處かへ遊びに出て見ようかしらん。」と云つて、急に思ひ出したやうに「さう云へばね、先日のチャーハーが當つた

んですつて。一圓五十錢とか取れたつて、お神さんは昨日大騒ぎしてたわ。今日は大方そのお金で芝居でも見に行つたんでせう。平生からお金さへありや、何よりも芝居が見たいつて、寢言にまで云つてた位だから。それでね、昨日私にこんな事を云ふのよ。今度は巽さんに判じて貰つて當つたんだから、貴女に三分一ぐらゐお金を分けて上げてでもいゝつて、人を見くびつてゐるわね。誰かがチーハーのお金なんか、……これから何時も貴郎に聞くことに定めたと云つてたけれど、貴郎、もうあんな相談に乗らない方がいゝわ。同じやうな人間と思はれるだけ損よ。」

「何、いゝさ。利益を分けるつてんなら、喜んで貰つたらいゝぢやないか。いやに上品ぶるね。さう味く當ると、僕も小使ひ取りに買つて見ようか。」

「そんなに反對するのが面白くつて。」と、女は男の澄ました顔を見ながら、親指に力を入れて、男の膝を壓した。

そして男の懷から喰み出てる手紙を見て、「大變長さうな手紙ね。」と、不審しさうに目を注いだ。

「讀んでもいゝよ、妹から來たんだが、面白いことが書いてあらあ。」と、訓一は攫み出して與へた。

「あゝ、お美代ちゃんからだ。まだ十四だとか、貴下は云つて被在つたけど、大變字が上手なのね。」と、とよ子は

讀み憎い字を判じく讀み出した。

訓一は座を立つて、出簾目に風琴を弾き始めた。すると、今まで靜かであつた向ひの中二階——豆腐屋の店仕舞ひが親子四人で室借りしてゐる廊下つきの六疊の間——で、人聲がして、やがてブーイ——と豆腐屋の喇叭の音が聞える。

「お止しよ、見つともないぢやないか。」と、妻君が叱りつけた。

「これでも風琴に合せてるんだい。昔取つた杵柄で、上手いものだなあ。」

「馬鹿だねえ、この人は。」

「さう云ふなよ、この喇叭を吹くと、おれも昔を思ひ出されらあ。」

と、夫婦は粗暴な聲で、馬鹿を云ひ合つては笑つてゐる。

訓一は音を止めて振り返つたが、とよ子はまだ手紙を膝の上に垂れて讀み耽つてゐる。窓は明るい日光を受けて、窺れた女の面が一際目立つてゐる。

訓一は會ふ毎に懷しげのなくなるやうに感じた。嘗てはその青味を帯びた顔、形よく尖つた鼻を見て女神でも見るやうに、氣高くも思つたことがあつたが、今はその頬に自

分の接吻の跟があると思つても不快である。自分の初めての戀がこんな女に注がれたかと思ふと、不甲斐なくも淺間しくも感ぜられる。

「おい、豊ちゃん、僕が久し振りで『春雨』でも唄はうか、君、弾いて見ないか。」と、訓一は以前二人で唄つたり弾いたりしたことを思つてゐる。

「えゝ。」と、女は生返事して、手紙を巻きながら、「よくこんな細かく書けることね、感心だわ。それに東京言葉が味のね。」

「彼れは小説ばかり讀んでるんだらう。」と、訓一は元の座に復つて、巻きかけの手紙を取つて、目についた一節を指差し、

「これなんか面白いぢやないか……」

……照坊もおさいも皆んな揃つて無事に暮してゐるのですが、私だけは無事ではないのですよ。私は毎日寒い川風に吹かれて學校へ通ふて居つても、風邪を引いたことはありません。身體は丈夫だけれど、それでも無事ではないのよ。……東京へ行つていろ／＼の人達が話をしてゐるのを聞くと、さぞ小説を讀むやうで面白いであらうと思ふと、早く／＼行つて見たくてならないのですが、父上が承知して下さらないので、ほんとに困つてゐるの

よ。……だから兄さんがどうかして學校へ行かして下さいな。おたのみ申してよ……

皆それ／＼に無事ぢやないんだね。しかし東京の者は皆んな小説のやうな生活をしてると思つてゐるのは面白い。」

と、訓一は妹の鈴のやうなバツチリした眼を思ひ出した。

「それ程來たいのなら、東京へ呼んでお上げなさればいい。二人で家を持てば、下宿屋にあるよりや、貴郎のためにも却つていゝでせう。色んな點から、その方が爲になるわ。」と、女は分別ありげに云つた。

「さうだね、僕もいろ／＼自分の爲を計らなくちやなるまい、もつと氣の利いた仕事を見つけて、家でも持つんだ。」と、訓一は眞面目で云つた。

「あゝ、それがいゝわ、早くさうおんなさいな。貴郎に家が出來たら、私も宿りに行けるんだから。」

「そんな事は何時の事だ分りやしない。」と、訓一はウツカリ世帯染みた話を口にしたのを悔いた。そして此頃はこの浮草のやうな女が、世帯話になると、眞面目に身を入れて聞き出すのを憐憫に感じた。

「私、どうしようかしら。」と、女は小聲で云つて、俯首いて額を押へた。

「どうしようつて、何を。」と、訓一は先から女が何をか